

150周年記念記事

創基150周年によせて

JR 東海 名古屋セントラル病院 院長 中尾 昭公

1973年(昭和48年)に卒業し、関連病院で7年余の修練後、第二外科(現消化器外科)に帰局した。途中、米国留学はあったものの31年間を医局で過ごすこととなった。消化器外科教授を2011年(平成23年)に定年より少し早く退任し、現在のJR東海名古屋セントラル病院で院長として、また現役外科医として勤務している。

私の教授時代は大学法人化を経験し、また大学院重点化の名のもと、ナンバー内科は臓器別に再編され、外科もナンバー外科から名称が変更されてきた。そして最近では臓器別再編に向かっていて聞く。私はナンバー内科、ナンバー外科の消滅後は外科の正確な歴史を辿ることは困難だろうと考えていた。2010年(平成22年)、第110回日本外科学会の学術集会を名古屋で開催させていただいたが、教室員総動員で「第二外科140年史」の編纂に取り組んだ。そして「名古屋大学医学部第二外科140年史」を刊行することができた。また、その時の資料や作成したパネルを学会会場で公開した。学会期間中には市民公開特別企画として「名古屋の外科140年史」と銘打ってパネリストに講演していただいた。私の最終講義は「第二外科140年の歴史を旅して」と題して講演させていただいた。2011年の第102回学友大会では東日本大震災のこともあり、外部より特別講演の演者を招聘せず、大会委員長であった私が自ら「名古屋の外科140年史」と題して講演することとなった。また「名古屋の外科140年史」のパネルも学友の皆様にご披露することができた。名古屋大学の外科がヨンゲハンス、ローレツ、後藤新平の時代より第一外科、第二外科に分かれて現在に至るまでの歴史を勉強する機会に恵まれたことは大変な喜びであった。

2002年から4年間を時報部長として学生とともに学友時報の編集に携わった。時報部長の名を利用して学友の皆様より寄付を募った。それはJR鶴舞駅北口から名工大に至る道路横のつつじの植え込みのなかに桜の苗木を植樹し、桜並木を完成させたいと思っていたからである。そして2002年から2005年にかけて26本を植樹し完成した(写真1)。現在では大きく成長し、素晴らしい桜並木(写真2)となっており、その桜の根元には寄贈していただいた皆様の団体名が石碑に刻まれている。かつて名大病院内には素晴らしい桜の古木が多くあったが、再開発ですべて切り倒され寂しい思いをしていたが、新たな桜の名所となっており嬉しい限りである。毎年、桜の季節になると名大病院の桜並木の下を歩くのを楽しみにしている。



写真1 桜並木完成当時 (2005年)



写真2 現在の桜並木 (2019年)

150周年記念記事

解剖学第二講座／機能組織学と創起150周年

機能組織学 教授 木山 博資

明治6年(1873)医学講習所が西本願寺別院に設けられ、新たに設置された解剖局でアメリカ人医師ヨンゲハンスにより初めて人体解剖が行われた。解剖学教室の源はここに求められる。その後明治9年に公立医学所、明治14年に愛知医学校となり、この時に奈良坂源一郎先生が東京大学より教諭として着任し、多くの教科書の作成とともに教育体制を構築し、名古屋大学の解剖学教育の基盤が確立した。明治36年(1903)に2教諭による体制ができ、その後愛知県立医学専門学校、愛知医科大学、名古屋医科大学を経て、昭和14年(1939)に名古屋帝国大学設置に伴い解剖学が3講座制となり、解剖学第二講座としての歴史が始まった。平成12年(2000)大学院重点化に伴い、解剖学第二講座は機能形態学大講座の一分野として「機能組織学」と改称され現在に至っている。

昭和14年名古屋帝国大学設置以来現在までの解剖学第二講座の歴代教授は、戸菟近太郎(1933-1960)、原淳(1960-1971)、空席(1971-1981)、星野洸(1981-1996)、杉浦康夫(1996-2010)、木山博資(2011-)である。各教授の主たる研究領域としては、戸菟近太郎教授のもとでは内分泌腺の組織発生学的研究がなされ、その流れを受けて原淳教授は上皮小体を中心に研究を展開した。星野洸(たけし)教授のもとでは免疫系細胞や結合組織の超微細構造の研究がなされた。杉浦康夫教授は疼痛メカニズムの研究を進め、木山博資は神経再生や変性の分子メカニズムの研究に取り組んでいる。名古屋大学解剖学教室が主催した日本解剖学会には、昭和35年に戸菟近太郎教授(第二解剖)のもとで開催された第65回日本解剖学会、昭和42年に山田和麻呂教授(第三解剖)が会頭として主催された第72回日本解剖学会がある。また、令和3年3月に第126回日本解剖学会を木山博資(第二解剖)が会頭として54年ぶりに名古屋で開催を予定している。

また、大会以外の本教室の貢献として、昭和28年に上梓された戸菟近太郎教授著「組織学」(南山堂)があげられる。本教室の講義実習から生まれた名著であり、その後改訂が進み戸菟近太郎教授の直弟

子の伊藤隆教授(北海道大学)に引き継がれ、現在でも組織学の教科書として使われている。また、社会貢献としては、解剖学第二／機能組織学は人体解剖トレーニングセミナーを昭和56年(1981)から40年の長きに亘って開催している。全国の解剖系教員の肉眼解剖実習の研修の場として、夏休みに1週間かけて実習研修を行なっている。令和元年までに受講生は994名に及び(59国公立大学、68私立大学、2海外大学などより参加)、本セミナーが医学医療の教育の質向上に果たした役割は大変大きい。長年の解剖学教育への貢献が評価され、平成26年には、日本篤志献体協会・篤志解剖全国連合会より篤志献体賞が授与された。また、日本解剖学会からその活動が高く評価され、継続的な後援を受けている。



2017年1月。杉浦康夫名誉教授の瑞宝中綬章受章お祝いの会(同門会)。星野洸第3代教授(前列右から2番目)、杉浦康夫第4代教授(前列右から4番目)、木山博資第5代教授(前列右から3番目)